

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520918

研究課題名(和文)ローマ時代中部イタリアにおける土器生産から消費までの地域動態研究

研究課題名(英文)The study of local dynamic state of pottery production and consumption in the central part of the Italian peninsula of Roman times

研究代表者

岩城 克洋 (IWAKI, Katsuhiko)

東京大学・総合文化研究科・特任研究員

研究者番号：70588227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ローマ時代のイタリア半島中部における土器生産から消費までの地域動態を詳細に分析することを目的としている。まず、主に調理用途に使用される耐熱性土器について、その主要5器種の帝政期から古代末期にいたる100年単位のおおまかな変遷の様相を分析した。さらに、それらの変遷にはローマを中心とする中北部と、ナポリを中心とする中南部で地域差が見られることも明らかにした。これらの変遷と分布の分析から、新しく認識した生産単位を含め、小規模な需給関係が地域のなかで複雑にからみあっている状況を捉え、水運を媒介としない程度の小規模な経済圏内における地域の動態の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to analyze a local dynamic state of pottery production to consumption in the central part of the Italian peninsula of Roman times. At first we analyzed aspects of the transition of the 100-year units from the Roman empire to the late antiquity about main five forms of the heat-resistant pottery which is mainly used in a cooking use. In addition to these, we made clear that a regional difference was seen in those transitions in north-central district around Rome and south-central district around Naples. From these analyses, it was observed the situation that small-scale supply and demand relationship including production units that we newly recognized were connected with each other intricately in regions. And we clarified one end of the local dynamic state in a small economic bloc of the degree not to mediate water transportation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：ローマ時代 一般土器 別荘遺跡

1. 研究開始当初の背景

ローマ時代に使用されていた土器は、その製作技法や用途などから、いくつかの大きなグループに大別されている。そのうち、釉薬その他の装飾が施されない素焼の雑器類は一般土器と呼称される。これら一般土器は、テッラ・シジラータやランプなどの精製土器や、ローマ時代流通システムの要とも言えるアンフォラといった他の土器群に遅れること暫く、1990年代後半頃からようやく研究の俎上にあがるようになってきた。一方で一般土器が遺跡から出土する遺物の中に占める量的割合は、建築部材やアンフォラといった大型土器類の次に多く、数的割合で見れば、研究対象となりうる個体数としては最も多い。ただ、残念なことに、一般土器には他の遺物種に比べると外形状の変化に乏しいという欠点があるため、出土量の多さに比して報告例は極端に少ないという状況にある。こういった状況などが、一般土器研究の進展を阻害しているため、量的な優位を活用し、資料価値を高めるような新しい視点の研究法が求められていた。

2. 研究の目的

現在までのところ、その他の精製土器類と違って一般土器に関しては、生産・流通・消費のいずれの局面に関しても断片的な情報が多く、それらを関連させた全体像が把握しづらい。本研究では、従来の研究とはやや異なる観点からの分析によって、これらの動態についての様相を明らかにすることを目的とする。そのためには、一般土器について最低限の年代比定と地域比定を可能とする程度には資料を集積して分析する作業が必要になってくる。しかしながら、これらの分析を経たとしても、その他の精製土器群のように、個別の資料毎の明確な所属年代を四半世紀単位で細かく特定するようなことは難しい。そのため資料群を「群」のまま取扱い、量や比率の分析によって所属年代を間接に推定することで、遺跡間の流通動態や出土地空間の機能推定などの研究に応用していくための指標を確立することを目指す。一方でこれらの指標を用いることで、統計処理による蓋然性の推測といった作業が研究上の重要な要素になると考えられる。このような手法を確立することで、資料としての一般土器の量的優位性を研究上に活かす基盤を構築することも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究資料の収集

まず、ティレニア海沿岸部である、トスカーナ州、ラツィオ州、カンパーニア州の3州に

重点をおいて、一般土器資料の報告例を収集する。この際、実測図等の掲載例は極めて少ないので、それら以外の単純計数データのような資料も積極的に収集する。併せてタルクイニア市カツァネッロ所在の別荘遺跡出土の膨大な一般土器についても、実測・計数などの作業によって資料化を図る。



第1図：主要な分析対象遺跡

(2) 収集資料の分類・整理

収集した資料・データを器形毎に分類・整理し、それぞれについて、帝政期から古代末期までの範囲で100年単位程度の大まかな時期変遷の様相を把握する。この時期変遷に基づいて再分類した各資料に、収集したデータなどの各種属性を加え、さらに遺跡情報や胎土情報とも関連させた土器資料データベースを作成する。土器資料データベースのインターフェースとしては、個別資料のデータ閲覧フォーム以外に、遺跡分布地図やデジタル化実測図のアーカイブ一覧表示を相互に関連付けて使用する。

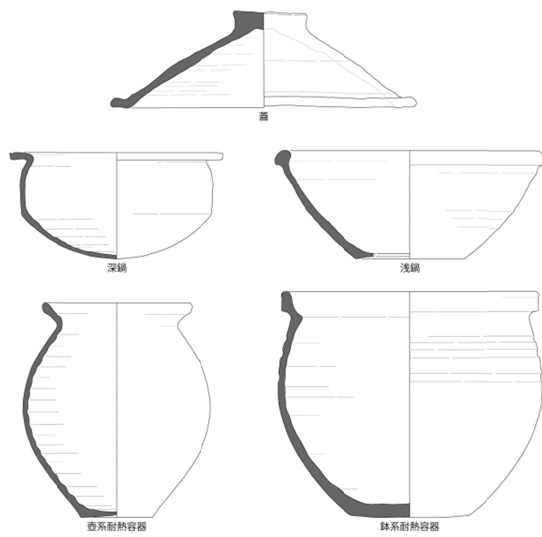
(3) 個別要素の分析

構築した土器資料データベースをもとに、そこから抽出した各種要素と、必要に応じて用意するその他の参考資料・データを組み合わせることで主に統計分析することにより、土器の産地分布と規模から流通の様相と範囲、消費実態などの傾向を捉える作業を行う。

4. 研究成果

(1) 器種の定義

一般土器は、食器・貯蔵容器 (CCM) と調理用土器 (CCF) の二つのグループに大別される。本研究では、より出土量の多い調理用土器に着目し、それらの資料収集と分類・整理を行った。調理用土器の器種は用途に応じて多岐に分化しているが、いまだ研究途上でこれらの器種類型の定義については研究者毎に差があり、明確になっていない。ここでは少数例の特殊な器種は統計分析には不向きなので除き、代表的と考えられる5器種を蓋、浅鍋、深鍋、鉢系耐熱容器、壺系耐熱容器と定義した。



第2図：調理用土器の代表的な5器種

(2)各器種毎の細別と変遷

収集した資料をもとに、定義した5器種それぞれの時期的・地域的な変遷を分析して、帝政期から古代末期にいたるまでの様相を復元した。

蓋

全体の形状から、把手を持たず、形状から蓋/皿兼用の機能が推定されるやや特殊な第1群、単純口縁もしくは単純な屈曲口縁をもつ第2群、折り返し口縁や肥厚口縁、複雑な屈曲口縁などをもつ第3群の三つに大別した。さらにそれぞれについて、第1群を2類、第2群を14類、第3群を15類に細別し、最終的に3群31類とした。時期的な変遷について見ると、第1群と第3群が古代末期にかけて出土量が減少する傾向にあるのに対し、第2群は帝政期から古代末期まで安定的に資料例が見られるということが言える。出土比率から見ても、蓋に関しては第2群が主流の器形であると考えられる。その他に第2群・第3群に関しては、時代が下るにつれて器壁の傾斜角がきつくなり、蓋の内部空間の体積が増大する傾向にあることが分かった。地域的な傾向としては、第2群に地域差があまりないのに対して、第1群はカンパーニア州の中南部方面にのみ出土例があり、第3群は主にトスカーナ州・ラツィオ州の中北部方面に出土例が偏っているという様相が見られた。

浅鍋

まず口縁部形状から単純口縁もしくは外側への折り返し口縁をもつ第1群と、肥厚口縁あるいは内側への折り返し口縁をもつ第2群の二つに大別した。さらにそれぞれについて、第1群を8類、第2群を9類に細別し、最終的に2群17類とした。時期的な変遷について見ると、第1群が帝政期から古代末期に至るまで普遍的に出土例が見られ、また大きな構造変化もないのに対して、第2群に関しては、古代末期にかけて器高が高くなり底径が減少する傾向が見られ、結果として深鍋の器形に近づいていく。そのうえで、古代末期に

かけて出土量が減少するという変遷が捉えられた。地域的な特徴としては、第1群に関して、一般的にトスカーナ州とラツィオ州北部、いわゆるエトルリア地方において、出土例が少ないという特徴があげられる。

深鍋

口縁部形状から、口縁の外側にあまり大きなリムが形成されないものを第1群、外側水平方向に比較的大きなリムが形成されるものを第2群として二つに大別した。さらにそれぞれについて、第1群を4類、第2群を5類に細別し、最終的に2群9類とした。時期的な変遷について見ていくと、第1群は全ての時期を通じて口径20cm前後の個体が中心で大きさに変化はないが、第2群は、3世紀頃までは30cm前後の大きな個体が中心であるのに対して、4世紀頃から20cm前後の個体中心へと小型化する。また、傾向として4世紀から5世紀頃にかけて、器形の画一化が進み、ヴァリエーションが減るとともに、断面形状のラインが直線的なフォルムから曲線的なフォルムに置き換わるところがある。地域的な傾向としては、第1群が分析対象としたイタリア半島中部全域に分布しているのに対して、第2群は主に中北部に分布しており、類によっては、中南部には全く分布しないものもあるということが言える。

鉢系耐熱容器

この器種に関しては、通常 壺系耐熱容器の一種として、直訳すれば「壺」と呼ばれて分類・報告されることが多いものである。本研究の過程で、器形の特徴から 深鍋との壺系耐熱容器の折衷的な要素を持つ一類として抽出分離して一器種として設定した。そのうえで口縁部形状の差異をもとに、口縁部が肥厚しないものを第1群、口縁部外側に肥厚するものを第2群、口縁部内側に肥厚するものを第3群として、三つに大別した。さらにそれぞれについて、第1群を3類、第2群を3類、第3群を1類に細別し、最終的に3群7類とした。時期的な変遷について見ていくと、第1群の一部に見られる、より 壺系耐熱容器に近い要素を持つものが1世紀から存在するのに対して、鉢系耐熱容器としての独自性が明確な大多数の資料は4世紀頃に登場し5世紀以降になって増加してくることが分かった。地域的な傾向としては、出土資料数の観点からみて、鉢系耐熱容器が5世紀以降に盛んに用いられるようになってくるのはイタリア半島中北部のみであり、中南部においては、主流とはならず、器種としてそれほど発達を示さない。

壺系耐熱容器

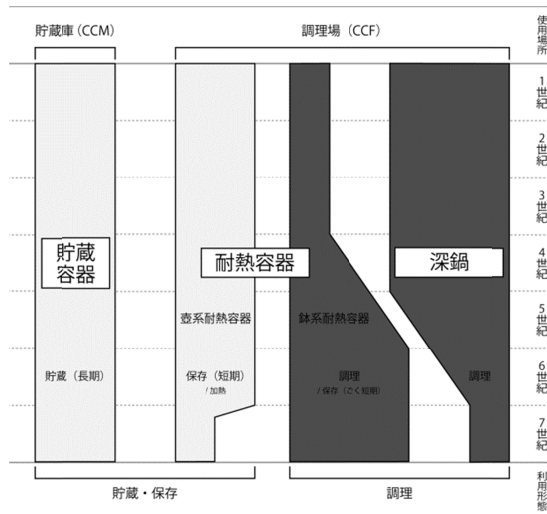
口縁部形状の差異および全体の器形をもとに、頸部のくびれが弱く深鉢状の全体形を呈するものを第1群、口縁端部が丸端のものを第2群、口縁端部が角端もしくは尖端のもの

を第3群として、三つに大別した。さらにそれぞれについて、第1群を2類、第2群を4類、第3群を4類に細別し、最終的に3群10類とした。壺系耐熱容器は、調理用土器の5器種の中では最も資料数が多く、普遍的に出土例が見られる一方、器形全体に通有の時期的・地域的な傾向は捉えられず、やや複雑な変遷の様相を見せる。時期的な変遷を見ると、第1群は、現在までのところ、例外的な資料が1世紀から4世紀にかけて見られるものの基本的に5世紀以降に盛行してくると認められる。それに対して第2群・第3群は、1世紀の段階から量的に安定して存在しており、4世紀以降になって類別の細分化が進行する。特に第2群の内、3類と4類に関しては、1世紀の段階で十分に確立した器形として存在していたと考えられる。第2群4類の資料は、1世紀から2世紀にかけて多く出土しており、この時期に類別として非常に多用されていたことが分かる。全体の傾向としては、第1群を除けば1世紀の段階から安定的にまとまった資料例があり、第2群・第3群ともに古代末期7世紀以降において若干の減少傾向を示していることが分かる。また、第1群については、鉢系耐熱容器との親縁性が最も高い一群であることも指摘できる。壺系耐熱容器に関しては、イタリア半島中部という範疇において地域的な特徴は見られない。

(3)調理用土器の機能と使用様態

調理用土器5器種の特徴と変遷を指標とし、その時期的、地域的な分布を統計分析することで、遺跡内における狭い範囲での使用動態の分析などと併せて、調理用土器の主体をなす耐熱容器に関して、今まで“壺(耐熱容器)”としてひとまとめにされてきた土器群が、貯蔵・保存に機能の軸足をおく壺系耐熱容器と調理に機能の軸足をおく鉢系耐熱容器とに大きく二分されることと、その鉢系耐熱容器が、古代末期にかけて、近似した機能を持つ深鍋を置換する形で盛行することを明らかにした。

第3図：耐熱容器の変遷と機能



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

岩城 克洋「イタリア半島中部におけるローマ期 CCF - 壺系 olla の研究」『古代』132号(査読有)、2014、149-175

岩城 克洋「ローマ時代調理器具としての CCF-coperchio の機能と用途」『型式論の実践的研究』(査読無)、2014、235-257

岩城 克洋「イタリア半島中部におけるローマ期 CCF - 浅鉢系 olla の研究」『古代』131号(査読有)、2013、185-209

岩城 克洋「ローマ時代調理器具としての CCF-tegame の機能と用途」『型式論の実践的研究』(査読無)、2013、149-168

岩城 克洋「イタリア半島中部における CCF/pentola の編年研究」『千葉大学文学部考古学研究室 30 周年記念考古学論攷』(査読無)、2012、689-712

松山 聡、岩城 克洋「ソムマ・ヴェスヴィアーナにおけるローマ時代遺跡調査」『遺跡学研究』第 8 号(査読無)、2011、140-145

〔学会発表〕(計 3 件)

岩城 克洋「ソムマ・ヴェスヴィアーナ遺跡 Cisterna3 における微細遺物の分析と検討」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」-ソムマ・ヴェスヴィアーナ、指宿 学融合研究 2011/2012- (2013 年 2 月 11 日 東京大学)

クラウディア・アンジェレッリ、松山 聡、岩城 克洋「ソムマ・ヴェスヴィアーナ、いわゆる「アウグストゥスの別荘」遺跡 2011/2012 年の調査における新知見」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」-ソムマ・ヴェスヴィアーナ、指宿 学融合研究 2011/2012- (2013 年 2 月 11 日 東京大学)

向井 朋生、廣瀬 育子、杉山 浩平「古代土器の印象」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」-ソムマ・ヴェスヴィアーナ、指宿 学融合研究 2011/2012- (2013 年 2 月 11 日 東京大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩城 克洋 (IWAKI, Katsuhiro)
 東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員
 研究者番号：70588227

(2)研究分担者

(3)連携研究者

杉山 浩平 (SUGIYAMA, Kohei)
 東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員
 研究者番号：60588226